二松學舍松苓會
東京支部報

失われし時を求めて

支部長　矢澤　喜成（50文）

二松學舍松苓会東京都支部の皆様、明けまして御目出とうございます。皆様には、恙無く令和六年の新年を御迎えの事と拝察致します。

扨、新型コロナウイルスにより、東京都支部では、令和元年七月の開催後、支部総会後の懇親会を中止として参りました。また、同年十月、谷中での開催後、文学・歴史散歩を中止として参りました。

しかし、昨年八月二十六日、支部総会後の懇親会を、漸く開催する事が出来ました。当日は、中洲記念講堂での、俳優水島涼太氏の一人芝居の公演もあって、沢山の方に御参加戴き、盛会裡に終える事が出来ました。

その懇親会の挨拶では、「この中止した三年分を取り戻すべく、飲み、食べ、盛り上がりましょう。」という言葉が、思わず口を突いて出ました。

そして、去る十月二十八日、人形町・兜町に於いて、文学・歴史散歩を復活させる事が出来ました。今年も、片山聖英幹事長による企画・案内により、懇親会まで大勢の御参加を戴き、とても楽しい時を過ごし、皆様と久闊を叙する事が出来ました。

今年は、神奈川・千葉両支部との交流を以前のように活潑化してゆきたいと存じます。また、支部総会・講演会・懇親会、そして、文学・歴史散歩で、皆様との楽しい時間を取り戻したいと存じます。

大谷翔平選手について

顧問　井上　和男（42文）

昨年はメジャーリーガー、大谷翔平選手が投打に亘って大活躍した年でした。ＷＢＣのＭＶＰを獲得した勢いをそのまま公式戦に持ち込み、アメリカンリーグホームラン王に加え、ＭＶＰも受賞しました。

日本のファンのみならず全米に大谷ブームを巻き起こし、多くの人に夢を与えています。

このことはもちろん賞賛されますが、それにも増して私が感銘を受けたのは彼の人間性です。チームメイトへのいたわり、出塁した時の敵チームの選手とのさりげない〝ふれあい〟、周囲の人々への気配りを目にして心が温まる思いでした。野球というスポーツを通して人々に感動を与え、自身の人間的成長を促す大谷選手。更にこの度は日本全国の小学校にグローブを三個ずつ寄贈するとのこと、〝素晴らしい〟のひと言です。

大谷選手の一挙一動を通じて私は〝生〟の在り方を教わったと感じています。欲望が渦巻く現今の世界に、明るく、爽やかな風を送り込んでいるのです。

私は豊かに生きることの意味を彼から教わった気がします。彼は全力で人生を駆け巡っています。彼の生き様は私たちに夢と勇気を与えてくれます。

令和六年が東京支部会員の皆様にとって実りある年となりますよう、お祈り致します。

（合掌）

新春を寿ぎ　心よりお慶び申し上げます

東京支部役員一同

顧問	井上　和男	（42文）
相談役	菅根　順之	（24文）
支部長	矢澤　喜成	（50文）
副支部長	星野　優子	（42文）
同	大山由美子	（47文）
幹事長	片山　聖英	（50文）
監事	大渕　俊明	（50文）
事務局長	中原　敬二	（62文）
常任幹事	畠山　幸治	（37文）
同	家永　修	（44文）
同	髙柳　幸雄	（49文）
同	齋藤　祐一	（51文）
同	野口　明宏	（51文）
同	菅原　義博	（53文）
同	高橋　映子	（53文）
同	奈佐　有記	（56文）
同	原　由来恵	（63文）
同	荒屋　陽子	（85文）
同	平井　領	（75政）

渋沢栄一氏肖像新札発行記念

文学・歴史散歩 ―水天宮・兜町

常任幹事　高柳幸雄（49文）

今回の文学・歴史散歩は、コロナ禍を経て四年ぶりの開催となった。コースは、来年渋沢栄一氏肖像の新一万円札が発行されることを記念して企画された。渋沢栄一氏は、学祖三島中洲先生亡き後の二松学舎を支え、二松学舎専門学校設立に尽力をされた。

十月二十八日（土）午後二時、参加予定者全員が水天宮前に集合した。

出発するにあたり、矢澤喜成支部長の挨拶があり、片山聖英幹事長から最初の訪問地・水天宮について説明があった。秋晴れのもと、一行はゴールの兜町を目指して出発した。土曜の午後ということもあり、人形町界隈は賑わいを呈していた。

コースは①「水天宮」→元吉原「末廣神社」②芝居町「三光稲荷（関三十郎・猫稲荷）」→「大丸」跡→蔦屋重三郎「耕雲堂」跡→「大安楽寺」→「伝馬町牢屋敷」跡・「吉田松陰終焉の地」③町人の街「宝田神社」→「椙森神社」→「出世稲荷」→「小網神社」④金融街「日証館ビル」→「兜神社」→「郵便発祥の地」→「銀行発祥の地」→「鎧橋」を２時間半で巡る行程であった。

各要所で片山幹事長から詳細、かつ丁寧な説明があり、参加者一同聞き入っていた。

人形町周辺は、江戸時代花街と芝居町として栄えていたこともあり、小粋な街の雰囲気が残っていた。

一方の兜町周辺は、明治時代、渋沢栄一氏の先導のもと、国立第一銀行をはじめとする銀行が建ち並び、後に証券会社が林立する金融の街として栄えてきたが、近年、街は変化しつつあるという。渋沢栄一氏の邸宅の跡地に建てられた日証館ビルは、リノベーションされ、1階にはスイーツの店が入っていて、若い人で溢れていた。

再び水天宮の交差点まで予定の時間で戻った面々は、心地よい疲れを感じていた。

一旦解散し、打ち上げ会場の「人形町・おか吉」へ移動し、昼間の疲れを癒した。今年度の総会の際に公演された俳優の水島涼太氏が途中参加され、さらに盛り上がり、午後7時半過ぎにお開きとなった。

参加者は次のとおり。

矢澤　喜成　片山　聖英
中原　敬二　畠山　幸治
星野　優子　家永　修
大山由美子　杉江　訓子
花岡　邦郎　黒岩美津子
野口　明宏　髙柳　幸雄
（準会員）――　山田雄一郎
原田佐知子　忍足　弘子

以上十五名〈敬称略〉

東京都松苓会の皆さん、ぜひ次回の文学・歴史散歩にご参加ください。

渋沢氏の心意気に触れて

野口明宏（51文）

二松と縁の深い渋沢栄一氏肖像の新札発行記念であるので、メインは兜神社と第一国立銀行跡でした。

兜神社は東京株式取引所と並ぶようにありましたが、高速道路の下にあるために昼なのに薄暗かったのです。

中には兜岩という岩があって、この岩の上に自分の財布を置いて落ちなければお金が増えるという言い伝えを案内役の片山氏から伺いました。

そして明治六年に渋沢栄一氏の創設した第一国立銀行にやってきました。銀行発祥の地です。渋沢氏は武士の心を忘れてはいけないということで建物の上には天守閣が作られたそうです。

その周辺には今も、スペイン瓦の屋根や丸窓、煙突などを取り入れたスパニッシュ様式のモダンな建物が残っています。渋沢氏の心意気に触れ、次の活力を得る一日となりました。

内側を見つめる目

山田雄一郎（準会員）

文学・歴史散歩に初めて参加した。今回の舞台の一つである人形町は私の従兄弟が住んでいたこともあり、何度か訪れたことがあった。

しかし、流石、東京支部の文学・歴史散歩は建物と建物の合間を縫った路地裏にまで足を運び、所狭しと隠れた名所の案内が幾つもあった。まさかアパートの敷地内の奥まった所にまで入り込むとは。今回の文学・歴史散歩を通して、普段の忙しさで目の前にあるものしか見ないようになっていたことに気付く。立ち止まり、思いを馳せ、昔が今に語りかけてくれるものがある。

若い人ほど、忙しい人ほど、このような会に参加するべき意義を感じる。打ち上げ会場の「おか吉」では俳優の水島涼太さんが合流し、お刺身や揚げ物に舌鼓を打った。片山幹事長の想像を掻き立てる解説をこれからも聴きたいと強く思った。

合縁奇縁シリーズ⑤

「困ったこと」から

岩﨑　聡（51文）

六十四歳。中学校教諭再任用四年目。二松学舎大学文学部国文学科卒。国語科教師。四十有余年、毎年三～四クラスの国語を担当、国語の教え子は延べ三千六百人以上ということになる。

これは本当に「困ったこと」である。

全員一年から三年まで持ち上がったとしても一千二百人が私の国語の授業を受けたことになる。いやはや困った。こんなに多くの人が私に国語を教わったんですよ。鳥肌・寒イボ・身震いである。

教え子たちの国語力が低いとか、授業がわかりにくい等とは言われていないので、「ホッ」とする。が、心底では前述の「困った」感が広く面積を占めている。

若い頃は読書が嫌いで、漢字は苦手。字も下手。大学一年の「書道」で、私の字を先生が皆に見せて、「岩崎君の字には『チセイ』がある」と、おっしゃった。「知性がある」…分かる人には分かるんだな～とニヤケていたら、先生は「稚性」と板書。皆が笑いを堪えた。

しかし、中・高時代、何故か国語だけテストで点数が取れた。国語をよく勉強した訳ではない。そもそも勉強することが苦手だった。勿論、国語も例外ではなく、勉強しないのに国語だけできる、勉強方法はわからないが、点は取れる生徒だったのだ。そして、それは今も根本的に変わらない。これは国語教師として「困ったこと」なのだ。

思い出を語る筆者

学級担任・生徒指導担当・部活動顧問として力を発揮したという自負はある。

柔道部顧問としては全国大会優勝者も出せた。

キャラクター・ハッタリ・カリスマ…で乗り切る！

これが教師としての私を育て、教えながら教えられる側からも育てられたのである。「困ったことに」…。

特別寄稿

教えるということ

朗読家　萩野安美（準会員）

私は現在、朗読を趣味とする人たちを指導しています。

殆んどが女性で、70代から80代。この年代になると歩んできた時間そのものが声となって表現されます。

声質、声量、速度という表現力など、個人差が出ますが、また、人間味豊かとも言えます。培われた人間性を尊重し、NOを多用せずYESと同意を持って指導にあたるように心掛けます。

聞き手は、教える側の言葉より、視覚から入る情報（表情、態度や動作）を優先すると言われます。40歳ぐらいになると、その人の考え方や言動を通して顔の表情は作り上げられ、表情人相が完成します。顔立ちは変えられなくても表情を豊かにすることは可能です。

例を挙げますと、まず口元は口角を上げる。次に目。目で語り、目で聞くとも言われるように、相手の目を見てアイコンタクトで話すことは相手を尊重する意味でとても大切です。

結果、理解が生じ、信頼が深まり、人間関係が前進します。次が「声は人なり」と言われる領域で、聞く人の心に感じよく届く発声、発音、声の表情を会得することは日常でも大切です。

話すということは大半が顔や声の表情（抑揚や間など）によって構成され、脳に届くのは音（声）が先で言葉（意味内容）は後から入ります。そのため聞き手は本能的に心地よい音かどうかを判断しています。

耳障りな声は、甲高い声やダミ声などです。この声の人は心地よい声にする努力が必要です。

心地よい声は音階のミの音が良いと言われていますので、それを意識することも重要でしょう。

第一印象を高め、相手に好印象を持たれるために視覚、聴覚、言葉の質を総合的に高めていくことです。

私は教える側として、ひとつの雰囲気、迫力を身につけるように励んでいます。

元気の素を得て

常任幹事　平井　領（75政）

自分自身に「元気を与えてくれるもの」はたくさんあります。テレビドラマ、マンガ、趣味、もちろんお金もそうですし、歌や言葉、友人や家族もそうですね。

しかし、ここで問題点が。元気をもらうために、まず「時間」が必要です。この時間はとても価値があるものです。そしてそこには必ず「笑顔」が貴重となります。小学校の卒業アルバムに私は教員かお笑い芸人になりたいと書いたことをふと思い出しました。

年末のお笑い番組を見て、みんなが大笑いする中、私はいつも号泣しながら見ています。夢を掴む瞬間に心を動かされてるのはもちろん、これからの人生、「元気を与える人」を目指さなきゃいけない。あの有名なナポレオン＝ボナパルトの名言に「リーダーとは希望を配る人のことである」というものがあります。そんな人間を目指し、今日も学舎（まなびや）の近くで仲間と飲むぞ～！アプリコットサークル最高！己尽！

哀悼

青忠先生

幹事長　片山聖英（50文）

令和5年7月30日、我が師青山忠一先生が亡くなった。連絡を戴いたのは四十九日の法要が終わった後であった。とにかく悲しく、無念のひと言に尽き、七年前の、青山ゼミで先生の米寿の祝事のときのご夫妻の笑顔が何度も回想された。

米寿会の後、青山先生は自ら終末ノートを書き進めたという。奥さまと話し合うと、米寿の祝いが自分の葬式の告別式のような気がしていると語られたそうだ。

だから実際のお葬式は家族葬として四十九日法要後に報告をという希望となったという。またお心遣いを賜わるだろうが、その総てをお断りするということも。さらに延命治療も行わないと決めたという。

早稲田大学から駒込高校の勤務を経て、二松学舎大学へ奉職された青山先生、とにかく二松学舎大学に勤務できたことが、そこで多くの学生たちに出会えたことが本当に幸せだったと反芻されていたそうだ。

青山先生はいつも包み込む優しさがあった。「人間っていうものはなあ」と絶えず話されていた。

90歳を超えて、何度か日大病院に緊急入院されたが、その度、回復して帰還を果たされていた。

コロナ禍のため、直接面会ができず、窓ガラス越しでの筆談を交わしていたとき、メモ用紙に突然、先生は「我が人生に悔いなし」と書いて示された。そのとき奥さまは涙が流れたと振り返られた。奥さまも「忠一は幸せな一生だったと思います」と語られている。

青山家代々の墓

青山忠一先生ご夫妻の米寿を祝う会

青山先生は稲荷町の「永昌寺」（住職・青山永晋氏）が菩提寺である。墓地には立派な宝輪塔の青山家代々のお墓がある。

永昌寺の本堂は加納治五郎が柔道の稽古をしたところで、先生は二松学舎大学に因縁を感じていると話されたことがあった。

三回忌（今年）には忠友会で墓参し、「偲ぶ会」をしたいと考えている。

シリーズ大山巡り②

六道之辻界隈

副支部長　大山由美子（47文）

京都の古い街並みが残る松原通り。お気に入りの通りの一つだ。松原橋を渡り、川端通りを横切ってさらに東へ。西福寺前の「六道之辻」指標を右に進むと、寺の案内板が視界に入る。

天歴五（九五一）年、醍醐天皇第二皇子光勝空也上人開創の西国第十七番中央観音霊場、六波羅蜜寺だ。当時京都に流行した悪病退散のため、空也上人自ら十一面観音像（現在の御本尊）を刻み、その御仏を車に安置し、市中を引き廻り、念仏を唱え、病魔を鎮められたと伝わる。また、青竹を蓮片のように八葉に割り、茶を立て、中に梅干と結び昆布を入れ、仏前に献じた茶を病者に薬湯として授けたこの行いは、「皇服茶」と伝わり、正月三日間、参詣者に授与している。

隣接する資料館「令和館」に数多く安置されている名宝のうちの三体を紹介する。胸に金鼓、右手に撞木、左手に鹿角の杖を持ち、草履をはき、念仏を唱えると口から六体の阿弥陀が現れたという伝承のままの写実彫刻「空也上人立像」は、像内の墨書にて、鎌倉時代の名匠運慶の四男康勝の作とされる。同時代の作とされる「平清盛像」は、経巻を手にし、静かな表情。一門の武建長久を祈願し、朱の中へ血を点じて写経したという仏者としての一面が感じられる。国宝の御本尊「十一面観世音菩薩像」は、十二年に一度、辰年に御開帳。寺伝等によると、門前の大きな池を栖とする龍が人々を苦しめていた折、空也上人が「毒獣、毒龍、毒虫の類といへども、この錫杖の音を聞けば菩薩心を発する」と諭され、錫杖で龍に二、三度触れられるとたちまち改悛。寺を永く守護し、参詣者の金運を御本尊に祈願したとされる。授与される護符「淵龍」は、金運の御守護として尊ばれている。

昨年は空也上人壱仟五十年御遠忌法要に参列した。辰年を迎えた今年の御開帳法要にも必ず参列したい。

著者・齋藤祐一氏（常任幹事・51文）に聞く
『明治・大正の文学教育者
―黒澤明らが学んだ国語教師たち―』

――今回、出版された本の概略を教えてください。

旧制京華中学校（明治30年創立、現京華中学・高等学校）で、明治・大正期に国語教師を務めた十五名の人物を取り上げて、その生い立ちから晩年までを描いたものです。漢文学者、国文学者、書家、翻訳詩人、歌人など、その専門とするところは様々ですが、いずれも京華中学で、また、後に高等学校や大学などで文学を講じた人物であることから、広く「文学教育者」という枠組みを設けて描いてみました。

令和５年６月新典社刊
B6判・342頁　2970円（税込）

――どんな人物を取り上げていますか。

二松学舎出身で漢文学者の細田謙蔵や書家の木内柔克を始め、一高の名校長といわれ、漱石の『吾輩は猫である』にも登場する杉敏介、映画監督黒澤明の作文を京華中学創立以来の名文と褒め、黒澤にも影響を与えた翻訳詩人の小原要逸、鷗外から厚い信頼を寄せられた国文学者の佐伯常麿などです。彼らの教育者としての姿とともに、近代の文学史や文化史などとの関わりにも触れながら、その文学者としての足跡をたどりました。

――本書をまとめる際に、苦労したことや工夫したことなどを教えてください。

取り上げた十五名は、これまでほとんど注目されなかったり、しばらく忘れ置かれてきたような人物です。そのため、まずは資料の掘り起こしに時間を要しました。北は山形、南は山口まで、各々の出身地にも足を運びました。子孫の方を探り当て、お話を伺ったこともあれば、全く手がかりなしということもありました。いずれにせよ、彼らの生い立った土地を訪れることで、改めて見えてくるものがあったように思います。何より楽しい時間でした。

本書は中高生にも読んでほしいと思い、多少は創作も交えながら、分かりやすい記述に努めたつもりです。各章の導入部に多くの紙幅を割いたのもそのためです。「枕」が長すぎるという批判も聞こえてきそうですが。

――ご自身も京華中学・高等学校で長く教師をされていましたが、本書で取り上げた教師について、また、その教育について、どのような感想をお持ちですか。

本書で描いた十五名は、それぞれの分野で足跡を残しており、文学教育者として、これだけは誰にも負けない、譲らない、そんな意志を頑固に、そしてしなやかに貫いた教師たちだったと思います。ときには仕事の上で不本意な思いをしたり、私生活で躓いたりもします。教壇の上では、独善的なところもあったかもしれません。が、そうした素顔を含めて、彼らの自負や気概は、教え子たちに直に沁みわたり、心を揺さぶり、その成長を促したことに疑いはありません。

いま教育の場では、期せずしてオンラインが普及し、さらにＡＩという人知を超えるような仕組みへも対応を迫られている状況です。教育の手法には変化が生じています。それでも、教え子たちと人と人として直に向き合い、その心身を育むことから逃れられないというこの職業に備わる聖域は、変わらずに大事にしなければならないと、本書をまとめ終えて改めて感じているところです。

教えること学ぶこと

常任幹事　菅原義博（53文）

学校の事務職員として、思えば長年、教える人（教員）と学ぶ人（学生・生徒）に囲まれて過ごしてきたが、学校が直面している最近のトピックといえば、ＡＩやChat Gpt等、デジタル技術への対応ではないだろうか。すでに学校現場では試行錯誤が始まっており、今後、教育の在り方が大きく変わっていく流れの中にいることを肌で感じているところである。

そんな学校教育の流れとは別に「学ぶ」人たちもいる。例年、本学の柏キャンパスでは地域住民を対象に生涯学習講座（公開講座）が行われており、高齢者の方も多数受講されている。人生百年時代とも言われているが、本当に学びたくなるのは年を重ねてからなのかも知れない。アットホームな雰囲気の中、活き活きと学ぶ受講生の様子を目にするたび、もしかすると漢学塾だった開設当時の二松学舎の「学びの風景」もこんな感じではなかったかと思いを馳せている。

舞台表現を通して

常任幹事　高橋映子（53文）

昨年十二月一・二日、初めて配信型の小劇場公演に参加した。眼前の観客は八名（で満員）。出演者は五名、音楽は生ギター一本。

劇団「風の森」第89回公演

セットは積み上げられた黒い木箱のみ、箱裏が楽屋。ギター音に導かれ小舞台に向かう。少しの緊張感が、何とも言えない高揚感に変わり、四十分足らずの上演時間はあっという間にエンディングを迎えた。

この感覚を始めて味わったのは二松学舎大学に入学した十八の時。映画「サタデー・ナイト・フィーバー」を観て踊る楽しさを知り、オリビア・ニュートン・ジョンのヒット曲「フィジカル」に触発されエアロビクスに目覚めたころ、絵本・物語を教材に英語を学び、国際交流するグループの友人に誘われ、ミュージカル小劇団の旗揚げに参加した。メンバーは座長と数名を除き十八、十九歳の学生で皆、演劇のイロハも声の出し方もわからない。スタニスラフスキーの『俳優修業』、千田是也の『近代俳優術』、竹内敏晴の『ことばが劈かれるとき』を課題図書に、アルバイト代を貯めては、夢の「劇団四季」、衝撃を受け、魅了された「状況劇場」「オンシアター自由劇場」に、解散間近の「劇団つかこうへい事務所」は紀伊国屋ホールに通い、舞台を見ては放心状態。自分の身体と声を使って、私ではない人生を生きる。喜怒哀楽のコントロール。公演前は泊まり込み、地方公演では合宿生活。ワクワクだらけの濃厚な毎日。しかし、本業にするには拙く、会社員と並行して二十八歳までアマチュアの劇団員生活を送った。

それから二十年ほどが過ぎ、五十代を目前にした頃、当時の仲間の声がけで、創立三十年を迎えていた劇団にシニアチームの結成が叶い、演劇活動を再開した。今度は記憶力と健康維持が目的。声を出し、身体を動かすうちに欲をかいた私は、現役世代の劇団員に紛れ込んで、阿佐ヶ谷、荻窪、中野の小劇場公演に出演するように。「壮而学。則老而不衰」。これを学び直しといえるかは疑問だが、日常の張り合いになっていることには違いないようだ。

事務局から

事務局長　中原敬二（62文）

令和五年十月から十一月までに年会費を納入していただいた方は次のとおりです。感謝申し上げます。

家永　修（44文）
伊藤　肇（59文）
大渕　俊明（50文）
大山由美子（47文）
黒岩美津子（51文）
齋藤　祐一（51文）
齋藤　曜子（57文）
斉藤ゆかり（51文）
坂口　和香（54文）
佐久間郁子（67文）
鈴木　龍男（44文）
髙柳　幸雄（49文）
寺澤　紀子（54文）
外池奈保美（56文）
花岡　邦郎（48文）
原　由来恵（63文）
丸山　裕（57文）
村井　英子（49文）
望月　貴司（53文）
森　留美子（43文）
渡辺　和則（特別）
渡辺　良一（55文）

松苓会東京支部の活動は、ホームページをご覧ください。

二松学舎大学ホームページトップから
https://www.nishogakusha-u.ac.jp/
⬅ **卒業生の方**をクリック
⬅ **松苓会ホームページ**をクリック
⬅ **支部紹介**をクリック
⬅ 各支部一覧から **東京都支部**をクリック

編集後記

令和六年の新年にあたり、芭蕉の句を一つ――。

命二つ
中に活きたる
桜かな　（野ざらし紀行）

我々は普通、命は一つで自分独りのものと考えている。しかし、芭蕉は「命二つ」と気付く。つまり、自分も誰かに支えられて生きている、と。

他者の存在があってこそ自分がある。こうした物差しを持って物事を見つめていくことが学ぶことの根幹ではないだろうか。

自分は自分、自分のことはある程度分かるからこそ自分以外の存在に気づくことが重要ではないか。それはまさに「思いやり」ということなのであるが、その心は、まず小さな環境の中で育つものではないか。

家族から社会へ、思考は成長に合わせて養われていく。その精神の根幹が二松学舎の中にあると改めて気づく新年である。（片山）

◆発行◆
二松學舎松苓会
東京支部　事務局（中原）
電話 090・7941・5116